

判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコトヲ得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルコトヲ得
抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルニハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辨論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スヲ以テ通例トス

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルコトヲ得
陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ口頭辨論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スコトヲ得

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式

ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不合法トシテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ら更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ通知ス可シ

(ハ)第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ
抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得
第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

(ニ)第四百六十六條 即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ(第

一項）

抗告ハ七日ノ不變期間内ニ之ヲ爲ス可シ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始
 マリ第二百五十三條第六百八十條及ヒ第七百六十九條第三項ノ場合
 ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マル抗告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルトキ
 ハ急迫ナラスト認メタル場合ニ於テモ亦不變期間ヲ保存ス（第二項）
 再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期ノ滿了後ト雖モ此
 訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得
 前條第一項ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變
 期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請
 ヲ正當ト認メサルトキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス可シ（第四項）

第二十六條 外國ニ於テ支拂ヲ爲ス可キ手形コハ捺印スルコトヲ要

セス

第二十七條 商法第七百九十條ニ掲ケタル裁判所役員ハ執達吏トス

○参照（商法）

第七百九十條 拒證書ハ裁判所ノ役員又ハ公証人之ヲ作ルモノトス若
 シ其他ニ此等ノ人ナキトキハ被拒者ニ於テ証人二人ノ立會ヲ以テ之
 ヲ作ル可シ但其証人ハ成年ノ男子ニシテ成ル可ク商人タルコトヲ要
 ス

第二十八條 商法第八百二十五條ニ掲ケタル十五噸以上ノ船舶中ニ

ハ日本形船舶百五十石以上ノモノヲ包含ス

○参照（商法）

第八百二十五條 總テ日本船舶ハ航海ノ用ニ供スル以前ニ法律、命令ニ
 從ヒ職權アル者ノ測定ヲ受ク可シ若シ其積量十五噸以上ナルトキハ
 管海官廳ヨリ船籍証書ヲ受ケタル後船籍港ヲ管轄スル裁判所ニ於テ
 船舶登記簿ニ登記ヲ受ク可シ

第二十九條 商法實施前ヨリ既ニ航海ノ用ニ供スル船舶ハ商法實施
 ノ日ヨリ一个年内ニ商法第八百二十五條ノ手續ヲ爲ス可シ

○参照（商法）

第八百二十五條（前條參照ニ掲ケ）

（第二項） 端舟其他櫓ノミチ運轉シ又ハ主トシテ櫓ヲ以テ運轉スル舟ニハ本編ノ規定ヲ適用セス

第三十條 商法第四百九十三條及ヒ（イ）（ロ）
稱スルハ川湖港灣ヲ謂フ

○參照（商法）

（イ）第四百九十三條 運送人ハ陸上又ハ國內水上ニ於テ商品其他ノ運送ヲ營業トスル商人タリ

（ロ）第五百十七條 陸上又ハ國內水上ニ於テ通例運送貨ヲ受ケテ旅客ヲ運送スル者ハ其運送ヲ爲スニ當リ旅客ノ爲メ至重ノ注意ヲ爲ササルニ因リテ之ニ加ヘタル身體上ノ傷害ニ付キ賠償ヲ爲ス義務アリ但シアル場合ニ於テハ自己ノ過失ニ非サルヲ證明スルコトヲ要ス

第三十一條 遞信大臣ハ其地ノ形狀ト危險ノ程度トニ應シテ適宜ニ港灣ノ區域ヲ定ムルコトヲ得

第三十二條 商法第八百六十七條及ヒ（イ）（ロ）
第九百六十六條ニ沿岸航海ト稱スルハ專ラ本邦海岸ニ沿フテ航行シ外國ニ至ラサルモノヲ謂フ但本邦ヲ版圖ニ屬スル諸嶋地トノ航行ハ亦沿岸航海ニ屬ス

○參照（商法）

（イ）第八百六十七條 船長ハ到達地ニ到着ノ後二十四時内ニ其地ノ管海官廳ニ出頭シテ檢閱ノ証ヲ受クル爲メ航海日誌ヲ差出シ同時ニ報告ヲ爲スコトヲ要ス其報告ニハ船名、噸數、積荷、發航ノ地及ヒ時、經過シタル線路、風候、天氣及ヒ潮流若シ死亡其他ノ災害若クハ船舶ノ現狀ニ變更アルトキハ其事由及ヒ航海中ニ生シタル著シキ事故ヲ包含ス
此報告ヲ爲ス前ニハ荷卸ヲ爲スコトヲ得ス但急迫ナル場合ハ此限ニ在ラス

沿岸航海ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

（ロ）第九百六十六條 船舶カ到達港ニ達セス且發航ノ時又ハ其船舶ニ付キ最後ノ通信アリタル時ヨリ一今年ヲ經過シタルトキ又沿岸航海ニ

商法（商法施行條例）

在テハ六ヶ月ヲ經過シタルトキハ其船舶ハ踪跡ヲ失ヒタルモノト看
做ス

第三十三條 商法第九百三十六條ニ掲ケタル沿岸、小航海ノ區域ハ從
來ノ慣習ト海上危險ノ程度トヲ酌量シテ遞信大臣之ヲ定ムルコト
ヲ得

○参照（商法）

第九百三十六條（第二項）

船荷証券其他ノ明告書ナクシテ積込ミタル貨
物及ヒ甲板ニ積込ミタル貨物ニ付テハ賠償ヲ爲スコト無シ但甲板
上ニ積込ミタル貨物ニ付テハ沿岸、小航海ノ船舶ニ非サルトキニ限ル

第三十四條 商法第八百三十六條及ヒ第九百三十四條ニ官ト稱
スルハ内國ニ於テハ區裁判所外國ニ於テハ日本領事若シ領事ナキ
トキハ其地ノ官廳トス

○参照（商法）

（イ）第八百三十六條

船舶ハ其所有者タラサル者ニ在テハ所有者ノ明示

ノ委任ニ依ルニ非サレハ有效ニ之ヲ賣却スルコトヲ得然レトモ船長
ニ在テハ明示ノ委任ヲ受ケサルモ避ク可カラサル必要アリテ官ノ認
認ヲ經タル場合ニ於テハ特ニ競賣ヲ以テ有効ニ之ヲ賣却スルコトヲ
得

（ロ）第九百三十四條

共同海損ノ確定及割賤ハ到達港其他航海ノ終極地

ニ於テ鑑定人之ヲ爲シ鑑定ノ選定ニ付争アルトキハ官ヨリ之ヲ命ス

第三十五條 司法大臣ハ各地方裁判所ノ意見ヲ聽キ其所轄地方ノ需
用ニ應シテ破産管財人ヲ命シ地方裁判所ハ之ニ依リ破産管財人名
簿ヲ作ル可シ

第三十六條 破産管財人タルノ命ヲ受ケタル者ハ正當ノ理由アルニ
非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十七條 破産管財人ノ任期ハ三年トス但再任セララルコトヲ得

第三十八條 名簿中ノ破産管財人破産裁判所ヨリ選定セラレタルト
キハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十九條 破産管財人ハ其職務ニ著手スル前公平誠實ニ其職務ヲ執ルコトヲ誓フ可シ

第四十條 破産管財人ハ其擔任スル破産手續中任期滿ツルモ之ヲ終結スルマテ解任スルコトヲ得ス

第四十一條 破産裁判所ハ忌避其他該事件ニ不適當ナルノ理由アリテ名簿中ノ破産管財人ヲ選定ス可カラスト認ムルトキハ他ニ破産管財人ヲ選定スルコトヲ得此場合ニ於テハ直チニ其旨ヲ司法大臣ニ上申ス可シ

前項ノ破産管財人モ名簿中ノ破産管財人ト同一ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十二條 職務執行ノ不當又ハ不正ノ爲メ管財人ノ職ヲ解クトキハ破産裁判所ノ公廷ニ於テ其理由ヲ付シテ之ヲ言渡ス可シ

第四十三條 管財人ノ報酬ハ一破産手續ノ全體ニ付キ又ハ收入シタ

ル價額ノ割合ニ應シテ之ヲ定メ財團ノ配當アル毎ニ其步割ヲ以テ之ヲ支拂フ可シ

第四十四條 第三十六條及ヒ第三十八條ノ規定ニ違フ者ハ刑法第七十九條ノ罰金ニ處ス

○參照(刑法)

第七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十五條 商法第千二條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ勾留若クハ監守セントスルトキハ其命令書ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ其勾留ニ係ル者ハ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ監守ニ係ル者ハ債務者ノ住所ヲ管轄スル警察官署ニ命シ其處分ヲ爲サシム

○參照(商法)

第一千二條 裁判所ハ破産宣告ト同時ニ債務者ノ動産ノ封印及債務者ノ即時勾留若クハ監守ヲ命ス

右處分ハ破産宣告前ト雖モ若シ債務者カ逃走シ若クハ逃走セントシ又ハ其財産ヲ隱匿スルキハ其地警察官廳ニ於テ債權者ノ申立ニ因リテ之ヲ爲スコトヲ得

商會社ニ在テハ連帶無限ノ責任ヲ負ヘル總社員ノ身體及ヒ財産ニ對シテ右ノ處分ヲ行フ

第四十六條 警察官廳ニ於テ債權者ノ申立ニ因リ債務者ヲ勾留若クハ監守セントスルトキハ命令書ヲ發シテ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ又ハ監守ノ處分ヲ爲サシム此場合ニ於テハ警察官廳ハ同時ニ事由ヲ具シテ其旨ヲ管轄地方裁判所ニ通知ス可シ

第四十七條 司獄官吏債務者ヲ受取リタルトキハ刑事被告人ヲ受取リタル手續ニ準シ之ヲ留置場ニ入ル可シ其他債務者ノ取扱ハ總テ刑事被告人ニ異ナルニト無シ

勾留中債務者ノ食料其他ノ費用ハ商法第一千三十二條ニ從ヒ破産財團ノ現額ヨリ之ヲ支拂ヒ不足アルトキハ留置場之ヲ負擔ス前條ノ場合ニ於テ債務者破産ニ至ラサルトキハ其中立人之ヲ支辨ス但申立人ハ申立ノ際右ノ費用ニ當ル金額ヲ豫納ス可シ

○參照(商法)

第一千三十二條 左ニ掲クル債權ハ届出及ヒ確定ニ關スル規定ニ從フコトヲ要セス

第一 裁判費用、管理費用其他破産手續上ノ費用

第二 公ノ手数料及ヒ諸稅

第三 管財人カ財團ノ爲メニ負擔シタル義務ヨリ生スル債權

右債權ハ破産主任官ノ指圖ニ從ヒ通常ノ方法ヲ以テ財團ノ現額ヨリ之ヲ支拂フ

第四十八條 監守ヲ爲ストキハ警察官吏ニシテ債務者ノ住所ニ就キ其逃走若クハ財産ノ隱匿ヲ豫防シ且其債務者ノ外人ト面接若クハ

通信スルヲ禁セシム

第四十九條 商法第千三條第二項ニ依リ債務者ヲ引致スルトキハ特ニ作リタル引致狀ヲ以テ之ヲ執行ス但其執行ハ刑事訴訟法ニ定メタル勾引狀執行ノ手續ニ準ス

○参照(商法)

第千三條(第二項) 債務者ハ裁判所ノ許可ヲ受ケルニ非サレハ其住地ヲ離ルルコトヲ得ス又裁判所ハ何時ニテモ債務者ノ引致ヲ命スルコトヲ得

第五十條 商法第千四條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ釋放スルトキハ決定書ヲ檢事ニ送致シ其執行ヲ爲サシム

○参照(商法)

第千四條 勾留若クハ監守ノ事由最早存セサルトキハ裁判所ハ其決定ヲ以テ債務者ヲ釋放ス可シ然レトモ債務者ヲシテ裁判所又ハ管財人ノ呼出ニ應シ何時ニテモ出頭ス可キ爲メノ擔保ヲ供スル義務ヲ負ハ

シムルコトヲ得

第五十一條 商法中非訟事件ニ關スル裁判所管轄ハ裁判所構成法ニ定ムルモノノ外、^(イ)第二百五十四條、^(ロ)第三百七十一條、^(ニ)第四百四十一條、^(ホ)第四百九十九條、^(ヘ)第五百十四條、^(ト)第八百五十六條、^(チ)第九百二條ノ事件ニ付テハ區裁判所トシ其他ノ事件ニ付テハ地方裁判所トス

○参照(商法)

(イ)第二百五十四條 總會ノ決議ニ依リテ會社ノ帳簿及ヒ其他ノ書類ノ貯藏ヲ委任セラレタル者ノ氏名住所ハ清算人ヨリ之ヲ裁判所ニ届出ツ可シ此届出前ニ在テハ清算人其貯藏ノ責任ヲ負フ

(ロ)第三百七十一條 債務者カ其債務ノ辨濟ヲ遲延シタルトキハ債權者ハ債務者ニ對シ訴ヲ起スコト無クシテ實契約書ヲ差出シ裁判所ノ命令ヲ得タル後賣物ノ賣却ニ着手スルコトヲ得

此命令ハ債權者ヨリ遲延ナク債務者ニ之ヲ通知ス可シ

(ハ)第四百四十一條 死亡シ又ハ退職シタル仲立人ノ日記帳ハ仲立人組

合ノ取締役ニ於テ其組合ナキ地ニ在テハ裁判所ニ於テ之ヲ預リ置ク可シ

(ニ)第四百九十九條 價額ニ付キ又ハ損傷ノ範圍ニ付キ當事者間ニ爭ノ生スルトキハ鑑定人ノ鑑定ニ因リ之ヲ定ム其鑑定人ハ當事者之ヲ任シ若シ當事者同意スルコトヲ得サルトキハ其申立ニ因リテ裁判所之ヲ任ス

(ホ)第五百十四條 運送狀又ハ其他ニ指名シタル受取人カ運送品ノ引受若クハ差出人ノ附シタル條件ノ履行ヲ拒ムトキ又ハ運送貨其他運送人ノ正當ナル債權ノ支拂ヲ爲ササルトキ又ハ其受取人ヲ提出スルヲ得サルトキハ運送人ハ運送品ヲ公ノ倉庫ニ寄託シ又ハ裁判所ノ命令ニ依リテ他人ニ寄託シ及ヒ第三百九十二條ノ規定ニ從ヒ其總債權ノ額ニ滿ソルマテ之ヲ賣却スルコトヲ得

(ハ)第八百五十六條 船舶債權者ハ其債權ノ證據完全ナルトキニ限リ裁判所ノ命令ニ依リテ船舶ノ競賣ヲ爲スコトヲ得但法律上ノ優先權ハ此カ爲メニ妨ケララルコト無シ

船舶ノ股分ニ付テノミ債權ヲ登記シ又ハ股分所有者ニ對シテノミ之ヲ主張スルトキハ其債權ニ關スル股分ノミノ競賣ヲ爲スコトヲ得其股分ノ額カ船舶全部ノ額ノ半ヲ超ユルトキハ此限ニ在ラス

(ト)第九百二條 船長ハ到達港ニ於テ運送貨附帶費用海損並ニ立替金ノ辨償及ヒ受取證書ヲ受ケテ船荷証券所持人ニ運送品ヲ引渡ス義務アリ若シ二人以上ノ船荷証券所持人カ申出ヲ爲ストキハ運送品ヲ公ノ倉庫ニ寄託シ又ハ裁判所ノ命令ニ依リテ之ヲ他人ニ寄託スルコトヲ要ス

第五十二條 明治十七年第九號布告質屋取締條例ニ依リ管轄廳ノ免許ヲ得タル質屋營業人コハ商法第一編第七章第九節ノ規定ヲ適用セス

第五十三條 明治六年第二百十五號布告代人規則ハ商事ニ付テハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セス

明治十年第六十六號布告利息制限法第三條及ヒ第五條ハ商事ニ付

テハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セス
明治十五年第五十七號布告爲替手形約束手形條例ハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

○商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件

（明治二十三年八月）
法律第六十號

朕商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 商法第二百六條ニ依リ株式會社債券ヲ發行スルハ總株金半額以上ノ拂込アリタル後ニ於テスヘシ

○參照（商法）

第二百六條 會社資本ノ増加ハ株券ノ金額ヲ増シ又ハ新株券若クハ債券ヲ發行シテ之ヲ爲シ又其減少ハ株券ノ金額又ハ株數ヲ減シテ之ヲ

爲スコトヲ得但資本ハ其金額ノ四分之一未満ニ減スルコトヲ得ス此債務ハ記名ノモノニシテ其金額ニ付テハ第七十五條ノ規定ヲ適用ス

第二條 債券ノ發行額ハ株金ノ拂込金額ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條 債券ヲ發行セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ主務省ノ認許ヲ受クヘシ

第四條 債券ハ一通毎ニ其債務金額、利子ノ歩合及仕拂時期、發行ノ年月日、番號、商號、社印、取締役ノ氏名、印、債權者ノ氏名ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

- 一 會社ノ營業所
- 二 株金總額及株金拂込額
- 三 債券償還ノ初期及最終期
- 四 會社開業ノ年月日
- 五 存立時期ヲ定メタル會社ハ其時期

六 認許ヲ受ケタル事

第五條 株式會社ハ債券ヲ發行スルトキハ債券原簿ヲ備ヘ債券一通毎ニ區分シテ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 債權者ノ氏名住所

二 債券ノ金額番號

三 利子ノ歩合

四 債券發行ノ年月日及讓渡ノ年月日

五 債券償還ノ初期及最終期

第六條 債券ノ讓渡ハ取得者ノ氏名ヲ債券及債券原簿ニ記載スルニアラサレハ會社ニ對シテ其効ナシ

第七條 株式會社ハ營業時間中債券原簿ノ展閱ヲ請求スル者アルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス此場合ニ於テハ請求人ニ對シテ二十錢以内ノ手数料ヲ求ムルコトヲ得

第八條 取締役ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラル

一 債券ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

二 債券原簿ヲ備ヘス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

○商事非訟事件印紙法（明治二十三年八月法律第六十六號）

朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商事非訟事件印紙法

第一條 商法中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ民事訴訟用印紙ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第五條第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 左ニ掲クルモノニ付テハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告又ハ假差押ノ申立

二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立

三 支拂猶豫ノ申立

第三條 左ニ掲クルモノニ付テハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

一 抗告ニ對スル答辯

二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル債務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方

金額ヨリ之ヲ扣除ス可キモノトス

財團ノ價額五圓マテ 四十錢

同 十圓マテ 六十錢

同 二十圓マテ 一圓二十錢

同 五十圓マテ 三圓

同 七十五圓マテ 四圓四十錢

同 百圓マテ 六圓

同 二百五十圓マテ 十三圓

同 五百圓マテ 二十圓

同 七百五十圓マテ 二十六圓

同 千圓マテ 三十圓

同 二千五百圓マテ 四十圓

同 五千圓マテ 五十圓

商法（商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件）

四十二

同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金總高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ

第六條 協諧契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス

民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ牴觸セサルモノニ限り之ヲ準用ス

○商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル

件（明治二十三年十月
法律第百一號）

朕商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治廿四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス
商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者有罪破産ニ係ルトキハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

- 一 詐欺破産ヲ爲シタル者ハ輕懲役ニ處ス
- 二 過怠破産ヲ爲シタル者ハ二月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

○沖繩縣ニ商法施行延期ノ件（明治廿三年十月
法律第百三號）

朕沖繩縣ニ商法施行延期ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治二十三年法律第三十二號商法ハ沖繩縣ニ於テハ當分ノ内之ヲ施行セス

○船籍規則（明治二十三年十月
勅令第百十九號）

朕船籍規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

商法（沖繩縣ニ商法施行延期ノ件）（船籍規則）

四十三

船籍規則

第一條 日本船舶ハ西洋形日本形ヲ問ハス總テ船籍港ヲ定メ其地市町村役場若クハ浦役場ノ船籍ニ編入スヘシ

第二條 船籍ニ編入セントスルトキハ國內ニ於テハ地方官廳國外ニ於テハ領事館ニ願出テ其積量ノ測度ヲ受クヘシ

第三條 入籍シタル船舶ニシテ登簿噸數十五噸以上ノ西洋形船百五十石以上ノ日本形船ナルトキハ遞信省ニ船籍證書ノ交付ヲ願出ツヘシ

第四條 船籍證書ニハ左ニ記載シタル條件ヲ記シ且年月日ヲ記載スヘシ但日本形船ニ在テハ第一項ノ信號符字及ヒ第八項乃至第十七項ヲ除キ其石數ヲ記シ西洋形帆船ニ在テハ第十三項乃至第十七項ヲ除ク

第一項 船舶ノ番號信號符字

第二項 船名原名

第三項 船籍港名管轄廳名

第四項 甲板ノ層數、樁ノ數、索具ノ裝置、船體ノ材料、船骨ノ材料、船首ノ形狀、船尾ノ形狀

第五項 造船工長ノ氏名、製造年月日、製造地名

第六項 船主ノ氏名住所（會社其他ノ法人若クハ二人以上ノ所有ニ係ルトキハ會社名若クハ管理人ノ氏名）

第七項 船舶ノ長幅及ヒ深

第八項 量噸甲板下部ノ噸數

第九項 量噸甲板上諸部ノ噸數

內 譯

甲板間ノ噸數

船尾室ノ噸數

圓室ノ噸數

其他諸室ノ噸數

第十項 總噸數

第十一項 登簿噸數

第十二項 乘組人常用室ノ噸數

第十三項 機關室ノ噸數

第十四項 機關ノ種類及ヒ數

第十五項 汽罐ノ種類及ヒ數

第十六項 推進器ノ種類

第十七項 公稱馬力

第五條 新造若クハ改造シタル船舶又ハ外國人ヨリ取得シタル船舶ノ假證書ハ前條第一項ヲ除キ船舶ノ種類ニ從ヒ其他ノ諸件ヲ記ス
ハシ

第六條 同一ノ船舶コシテ再度以上假證書ノ交付ヲ受ケタル場合ト雖モ其効力ハ初度ノ證書ニ記載シタル年月日ヨリ起算シ商法第八百三十條第二項ノ期限ヲ超過スルコトヲ得ス

第七條 船籍證書ノ交付ヲ願出ツルトキハ手数料トシテ本證書ハ壹圓假證書ハ五拾錢ヲ納ムヘシ

第八條 船籍證書ハ常ニ船内ニ保持シテ船長之ヲ監守シ稅關官吏、司檢官、警察官、領事其他正當職權アル者ニ於テ檢閲ヲ要スルトキハ何時ニテモ之ヲ開示スヘシ

第九條 船籍證書ヲ受有スル西洋形船ハ左ノ事項ヲ銘記シ且其事項ニ變更ヲ生シタルトキハ其都度之ヲ改記スヘシ

第一項 船首兩舷ノ外部ニ船名、船尾外部ノ見易キ所ニ船名及ヒ船籍港名ヲ方三寸五分以上ノ國字並羅馬字ヲ以テ記スヘシ

第二項 中央ノ船梁ニ船籍證書ノ番號及ヒ登簿噸數ヲ彫刻シ又

ハ該番號噸數ヲ彫刻シタル板ヲ固釘スヘシ

第三項 船首材及ヒ船尾材ノ外部兩側面ヘ水脚ヲ示ス爲メ一尺

毎ニ方五寸ノ羅馬又ハ亞刺比亞數字ヲ以テ其尺度ヲ記スヘシ

第十條 船籍證書ヲ受有スル日本形船ハ船尾ニ船名、船梁ニ船籍證書ノ番號及ヒ石數ヲ記スヘシ

第十一條 船舶所有者船籍港ニ居住セサルトキハ本船ニ關スル事務ヲ代辨セシムル爲メ其船籍港ニ代理人ヲ置キ之ヲ市町村役場若クハ浦役場ニ届出ツヘシ

第十二條 船籍ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ船籍面ノ訂正ヲ請ヒ且船籍證書ノ書換ヲ申立ツヘシ

第十三條 船籍港ヲ移轉シタルトキハ原籍ヲ削除シ移轉地ノ船籍ニ編入シ且船籍證書ノ書換ヲ申出ツヘシ

第十四條 船舶ノ所有權ヲ他人ニ移轉シタルトキハ其旨ヲ市町村役

場若クハ浦役場ニ申出且船籍證書ヲ返納スヘシ

第十五條 船舶ノ破壊、喪失、失踪、解撤ニ歸シタルトキ若クハ日本船舶タルノ資格ヲ失ヒタルトキハ本船ノ除籍ヲ請ヒ且船籍證書ヲ返納スヘシ

第十六條 本條例第八條乃至第十五條ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十七條 明治十二年五月第十九號布告ニ依リ付與セシ西洋形船登簿船免狀ハ此規則施行ノ日ヨリ船籍證書ト見做シ本證書ト同一ノ効力ヲ有ス

第十八條 明治三年正月布告商船規則同十二年二月第五號布告同年五月第十九號布告同十四年二月第十二號布告其他從前ノ成規中此規則ニ牴觸スルモノハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 此規則ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行ス

○船籍規則施行細則（明治廿三年十一月）
逓信省令第二十號

船籍規則施行細則左ノ通り相定メ明治二十四年一月一日ヨリ實施ス

船籍規則施行細則

第一條 船舶ヲ製造シ若クハ外國人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シタル者ハ其種類ニ從ヒ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ作り本船々籍港所轄ノ市町村役場又ハ浦役場ヲ經テ本船ノ測度ヲ地方官廳ニ願出テ且同時ニ該役場へ船籍ノ編入ヲ請ヘシ

第二條 市町村役場又ハ浦役場ニ於テハ前條ノ件名書ヲ調査シ五十石未滿ノ日本形船ハ其事項ヲ直チニ役場ノ船籍臺帳ニ登録シ其他ノ船舶ハ件名書ヲ地方官廳ニ送達シ其積量ノ測度ヲ申請スヘシ

第三條 地方官廳ニ於テハ船舶積量測度規則ニ從ヒ之ヲ測度シ第三號若クハ第四號書式ノ測度表ニ依リ其積量ヲ算出シ第五號若クハ

第六號書式ノ測度證書ヲ作り件名書ヲ照査シ前條ノ市町村役場又ハ浦役場へ送付シ

測度證書及ヒ件名書ヲ受領シタル市町村役場又ハ浦役場ニ於テハ測度證書及ヒ件名書ニ依リ其事項ヲ船籍臺帳ニ登録スヘシ

第四條 前條ノ船舶ニシテ船籍證書ヲ受有スヘキモノナルトキハ更ニ市町村長又ハ浦役人ノ與書ヲ受タル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添へ地方官廳ヲ經由シテ船籍證書ノ交付ヲ逓信省ニ願出ヘシ但左記ノ船舶ハ船籍證書ヲ受有スルノ限ニアラス

- 一 國內水上ヲ運航スル船舶
- 一 端舟其他櫓艇ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓艇ヲ以テ運轉スル舟

第五條 地方官廳ニ於テハ前條ノ願書及ヒ件名書ニ測度表ヲ添へ之ヲ逓信省ニ進達スヘシ

第六條 遞信省ニ於テハ件名書及ヒ測度表ヲ調査シ其船舶ノ種類ニ從ヒ第七號第八號若クハ第九號書式ノ船籍證書ヲ作り之ヲ地方官廳ニ送付シ地方官廳ハ市町村長又ハ浦役人ヲシテ之ヲ船主ニ交付セシムヘシ但第十一條ニ係ル船舶ニ交付スヘキ船籍證書ハ遞信省ヨリ直ニ領事館ニ送付シ其旨ヲ船籍地方官廳ニ通知スヘシ

第七條 船籍港外ニ於テ船舶ヲ製造シ若クハ外國人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シ船籍證書ヲ受有スヘキ船舶ナルトキハ願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添へ本船所在地ノ地方官廳又ハ領事館ニ本船ノ測度ヲ請ヒ且假證書ノ交付ヲ願出ヘシ但本船々籍港ニ到著シタルトキハ速ニ第一條及ヒ第四條ノ手續ヲ爲スヘシ

第八條 前條ノ願書ヲ受領シタル地方官廳又ハ領事館ニ於テハ第三條ノ手續ニ由リ其積量ヲ算出シ直ニ第十號第十一號若クハ第十二號書式ノ假證書ヲ作り之ヲ願人ニ交付シ且同時ニ其證書ノ謄本及ヒ件名書測度表ヲ本船々籍港地方官廳ニ送付スヘシ

第九條 假證書ノ謄本及ヒ件名書測度表ノ送付ヲ受ケタル地方官廳ニ於テハ本船々籍港ニ到著ノ上其測度ヲ願出タルトキ送付ノ測度表ヲ調査シ正確ナリト認ムルトキハ更ニ測度ヲ要セス直チニ測度證書ヲ作り件名書ト共ニ市町村役場又ハ浦役場ニ送付スヘシ

第十條 內國人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シ若クハ船籍ヲ移轉シタルトキハ測度ヲ除クノ外第一條ノ手續ニ依リ其入籍ヲ請ヒ且船籍證書ヲ受有スヘキ船舶ナルトキハ市町村長又ハ浦役人ノ奥印ヲ受ケタル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添へ地方官廳ヲ經由シ其證書ノ交付若クハ書換ヲ遞信省ヘ願出ヘシ

第十一條 外國ニ於テ船舶ヲ製造シ又ハ他人ニ屬スル船舶ノ所有權ヲ取得シ單ニ外國地方ヲ航海シ本國ニ廻船セサル者ハ其事由ヲ具シタル願書ニ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添へ本船所在地

ノ領事館ニ其測度ヲ願出テ同館ヨリ交付ノ測度證書ヲ本船々籍港ニ送付シ第一條ニ依リ其入籍ヲ請フヘシ但船籍證書ヲ受有スヘキ船舶ナルトキハ本證書到達迄ノ間領事館ヨリ假證書ヲ願受ルヲ得ヘシ

領事館ニ於テハ第三條ノ手續ニ依リ其積量ヲ算出シ測度證書ヲ願人ニ交付シ且同時ニ本船件名書測度表ヲ其船籍地方官廳ニ送付スヘシ但假證書ヲ願出タルトキハ第八條ノ手續ニ依リ之ヲ交付スヘシ

第十二條 船籍港外ニ於テ船籍證書ヲ受有シタル船舶ノ所有權ヲ取得シタルトキハ測度ヲ除クノ外第七條ノ手續ニ依ルヘシ

第十三條 船籍ニ記載シタル事項ニ變更ヲ生シタルトキハ市町村役場又ハ浦役場ニ船籍ノ訂正ヲ請ヒ且船籍證書ヲ受有シタル者ハ市町村長又ハ浦役人ノ與印ヲ受ケタル願書ニ第一號若クハ第二號書

式ノ件名トヲ添ヘ地方官廳ヲ經由シテ其證書ノ書換ヲ遞信省ヘ願出舊證書ヲ返納スヘシ但積量ノ變更ニ係ルトキハ更ニ測度ヲ受ケタル後本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第十四條 船籍證書又ハ假證書ヲ喪失若クハ毀損シタルトキ船籍港ニ於テハ其事由ヲ具シタル願書ニ市町村長又ハ浦役人ノ與印ヲ受ケ地方官廳ヲ經由シテ其船籍證書ノ再渡若クハ書換ヲ遞信省ヘ願出ヘシ

船籍港外ニ於テハ其事由ヲ具シ第一號若クハ第二號書式ノ件名書ヲ添ヘ直チニ本船所在地ノ地方官廳又ハ領事館ヘ假證書ノ交付ヲ願出ヘシ

第十五條 前條ニ依リ假證書ヲ交付シタル地方官廳又ハ領事館ニ於テハ其事由ヲ詳記シ件名書及證書ノ謄本ヲ添ヘ速ニ本船々籍港ノ地方官廳ヘ通報スヘシ

第十六條 船籍規則第十五條ノ場合ニ於テハ其事由ヲ具シ浦役場ニ除籍ヲ請ヒ且船籍證書ヲ受有シタル者ハ地方官廳ヲ經由シ之ヲ遞信省ヘ返納スヘシ但假證書ナルトキハ其發出ノ官廳ヘ返付スヘシ

第十七條 船籍證書又ハ假證書ノ交付ヲ願出ル者ハ初渡再渡書換ヲ問ハス出願ノ際船籍規則第七條ニ掲クル手数料ヲ上納スヘシ

附則

第十八條 明治十二年五月二十一日内務省丙第二十五號達ハ此細則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條 現在ノ船舶ハ此細則施行ノ爲メ更ニ積量ノ測度ヲ要セス從來ノ噸數石數ニ依ル（書式略之）

○商業及船舶ノ登記ニ關スル件（明治廿三年七月勅令第三百三十三號）

朕商業及ヒ船舶ノ登記ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 商業ノ登記公告ノ手数料左ノ如シ

第一 商號後見人未成年者婚姻契約及ヒ代務ノ登記公告ハ本店ト

支店トニ拘ハラス各金三拾錢

其變更又ハ追加ノ登記公告ニ付テモ亦同シ

第二 會社ノ登記公告ハ本店ト支店トニ拘ハラス合名會社ニ付テ

ハ金六圓合資會社株式會社ニ付テハ各金拾圓

其受取又ハ追加ノ登記公告ハ每一件ニ付金三拾錢

第三 登記簿ノ閱覽ニ付テハ金拾錢

第四 登記簿ノ謄本ハ用紙壹枚ニ付金拾錢但一行二十字二十行ヲ

以テ壹枚トシ十一行以上ハ壹枚十行以下ハ半枚トス

第二條 商法第八百二十五條ノ登記ニ付テハ金三圓ヲ納ムヘシ

○參照（商法）

第八百二十五條 總テ日本船舶ハ航海ノ用ニ供スル以前ニ法律命令ニ從

ヒ職權アル者ノ測度ヲ受ケ可シ若シ其積量十五噸以上ナルトキハ管海

管轄ヨリ船籍證書ヲ受ケタル後船籍港ヲ管轄スル裁判所ニ於テ船舶登記簿ニ登記ヲ受ケ可シ

端舟其他權權ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ權權ヲ以テ運轉スル舟ニハ本編ノ規定ヲ適用セス

第三條

手数料ハ登記印紙ヲ以テ納ムヘシ（明治廿三年勅令第二百七號ヲ以テ本條追加）

○商業及船舶ノ登記公告ニ關スル取扱規則（明治二十三年十月司法省令第八號）

商法ノ規定ニ依リ商業及船舶ノ登記公告ニ關スル取扱規則左ノ通之ヲ定ム（書式雛形ハ別ニ頒ツ）

第一條 商法第十八條ノ商業登記ニ付テハ各登記所ニ左ノ簿冊ヲ備フ可シ

第一 商號登記簿

第二 後見人登記簿

第三 未成年者登記簿

第四 婚姻契約登記簿

第五 代務登記簿

第六 合名會社登記簿

第七 合資會社登記簿

第八 株式會社登記簿

○參照（商法）

第十八條 商號後見人、未成年者、婚姻契約、代務及ヒ會社ニ關スル商業登記簿ハ當事者ノ營業所又ハ住所ノ裁判所ニ之ヲ備ヘ登記及ヒ之ニ關スル事務ハ其裁判所之ヲ行フ

前項ノ營業所又ハ住所ヲ他ノ地ニ移シタルトキハ既ニ登記シタル事實カ尙ホ存スル場合ニ限リ移轉地ニ於テモ亦更ニ其登記ヲ受ケ可シ

第二條 商法第八百二十五條第八百五十二條及ヒ（ハ）第八百五十七條

第二項ノ登記ハ商法及ヒ登記法ノ規定ニ依リ船舶登記簿ニ之ヲ爲ス船舶登記簿ノ雛形ハ登記法ニ關スル省令ニ於テ之ヲ定ム

○參照（商法）

(イ) 第八百二十五條 總テ日本船舶ハ航海ノ用ニ供スル以前ニ法律命令ニ從
ヒ職權アル者ノ測度ヲ受ク可シ若シ其積量十五噸以上ナルトキハ管海
官廳ヨリ船籍證書ヲ受ケタル後船籍港ヲ管轄スル裁判所ニ於テ船舶登
記簿ニ登記ヲ受ク可シ

端舟其他權權ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ權權ヲ以テ運轉スル舟ニ
ハ本編ノ規定ヲ適用セス

(ロ) 第八百五十二條 船舶ニ對スル債權ノ登記ハ第八百五十七條ノ場合ヲ除
ク外ハ登記ヲ受ケタル船舶ニシテ特ニ作レル抵當證書ニ依ルニ非レハ
之ヲ許サス

右ノ登記ハ其日附ヨリ起算シテ三ヶ年間其效ヲ有ス若シ此期間滿了前
ニ之ヲ更新セザルトキハ其效ヲ失フ

(ハ) 第八百五十七條(第二項) 構造中ノ船舶ノ登記ハ其登記ヲ受クルニ至ル迄
ハ將來船籍ヲ受ク可キ地ノ裁判所ニ相當ノ明告ヲ爲スヲ以テ之ニ代フ

第三條 商業登記簿ハ附錄第二號乃至第九號ノ雛形ニ依リ地方裁判

所ニ於テ之ヲ調製スヘシ。

明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則 (イ) 第三條 (ロ) 第四條ハ
本令ニ之ヲ適用ス

○參照(明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則)

(イ) 第三條 登記簿ハ登記所ノ請求ニ因リ地方裁判所長之ヲ渡スモノトス
登記所ハ凡一年間用フヘキ登記簿ノ冊數及ヒ各冊ノ枚數ヲ見積リ豫メ
前項ノ請求ヲ爲ス可シ

(ロ) 第四條 登記簿ハ地方裁判所長其枚數ヲ表紙ノ裡面ニ記載シテ之ニ職
氏名ヲ署シ職印ヲ捺シ且毎葉ニ契印ス可シ

第四條 登記所ニ於テハ會社印鑑帳及ヒ登記見出帳ヲ調製シ印鑑帳
ニハ商法第七十一條ニ依リ差出シタル印鑑ヲ貼付シ登記官吏之ニ
契印シ見出帳ニハ商號ニ依リ登記ヲ區別シ以テ索引ノ便ニ供ス可
シ

○參照(商法)

第七十一條 社印ニハ商號ヲ刻シ其印鑑ヲ商業登記簿ニ添ヘテ保存スル爲メ之ヲ第十八條ニ掲ケタル裁判所ニ差出スコトヲ要ス社印ヲ變更シ又ハ改刻スルトキモ亦此手續ヲ爲ス

第五條 登記ノ届出ハ陳述書ヲ以テ之ヲ爲シ其陳述書ニハ登記ノ事項ヲ證スル爲メ必要ナル書類ヲ添ヘ左ノ諸件ヲ記載シ當事者之ニ署名捺印ス可シ

第一 登記ヲ受ク可キ事項

第二 當事者ノ住所職業氏名

第三 年月日

第四 登記所ノ名

登記法第八條第二項及ヒ明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則第七條第二項ハ本令ニモ之ヲ準用ス

○参照（登記法）

第八條（第二項）登記ヲ請フ者アルキハ登記官吏ハ之ヲ受付帳ニ記載シ契約者ヨリ差出シタル書類ノ受取証ヲ下付ス可シ

（明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則）

第七條（第二項）代人ヲ以テ登記ヲ請フトキハ代理ノ委任狀ヲ付與シ之ヲ登記所ニ差出サシム可シ

第六條 登記ノ届出ハ登記官吏ニ於テ陳述書ヲ受理シタル時ヲ以テ之ヲ終リタルモノトス

登記法第八條第一項ノ受取証ヲ下付シタルトキハ陳述書ヲ受理シタルモノトス（本條ニ登記法第八條第一項トアルハ恐クハ第二項ノ誤リナラン）

○参照（登記法）

第八條（第二項）登記ヲ請フ者アルトキハ登記官吏ハ之ヲ受付帳ニ記載シ契約者ヨリ差出シタル書類ノ受取証ヲ下付ス可シ

第七條 登記官吏ニ於テ登記ノ届出ヲ不適當ト認ムルトキハ當事者ヲシテ改正セシム可シ之ヲ改正シ得ヘカラサル場合又ハ改正セサ

ル場合ニ於テ登記ヲ拒ムトキハ理由ヲ付シタル命令書ヲ發ス可シ
第八條 登記ヲ受クル爲メ差出シタル書類ニシテ登記所ニ留置ク可
キモノ殊ニ登記陳述書及ヒ商法第六十八條ニ掲ケタルモノハ之
ニ登記簿ノ冊號及ヒ其丁數ヲ記シ登記簿ノ區別ニ從ヒ各箇ニ綴込
ミ之ヲ保存ス可シ

○參照（商法）

第六十八條 會社ハ前條ニ掲ケタル金額拂込ノ後十四日內ニ目録見書、
定款、株式申込簿及ヒ設立免許書ヲ添ヘテ登記ヲ受ケ可シ
登記及ヒ公告ス可キ事項ハ左ノ如シ

- 第一 株式會社ナルコト
- 第二 會社ノ目的
- 第三 會社ノ商號及ヒ營業所
- 第四 資本ノ總額、株式ノ總數及ヒ一株ノ金額
- 第五 各株式ニ付拂込ミタル金額

第六 取締役ノ氏名、住所

第七 存立時期ヲ定メタル時ハ其時期

第八 設立免許ノ年月日

第九 開業ノ年月日

裁判所ハ會社ヨリ差出シタル書類ヲ登記簿ニ係ヘテ保存ス

第九條 登記ハ雛形ニ示ス所ノ例ニ依リ相當欄内ニ之ヲ爲シ年月日
ヲ記シ登記官吏之ニ署名捺印ス可シ

凡テ豫備欄内ニハ商法第七十九條第三百三十八條及ヒ第六十九條
ニ列舉シタル以外ノ事項ヲ登記スルモノトス
會社ノ支店登記ノ豫備欄内ニハ合名會社ニ在テハ本店ノ業體、商號、
營業所ヲ登記シ合資會社及ヒ株式會社ニ在テハ右ノ外會社資本ノ
總額ヲ登記ス可シ

第十條 公告ハ登記ヲ爲シタル登記所ノ名ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

公告ヲ爲ス可キ新聞紙ハ登記所所在地ニ於テ發行スルモノ若シ其地ニ於テ發行スルモノナキトキハ登記所ヲ管轄スル區裁判所所在地ニ於テ發行スルモノタル可シ
若シ其地ニ於テ發行スル新聞紙ナキトキハ左ノ場所ニ揭示シテ公告ニ代ユ可シ

第一 區裁判所ノ揭示場

第二 其地ニ於ケル人民群集ノ場所

登記所ハ新聞紙發行人ト一曆年ノ間商業登記ノ公告ヲ委託スル約定ヲ爲シ豫メ其旨ヲ公告シ置ク可シ

第十一條 明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則第三十一條

第三十二條ハ本令ニ之ヲ適用ス

○參照(明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則)

第三十一條 登記簿ノ一用紙中或ル欄内更ニ登記ヲ爲ス可キ餘白ナキニ

至リタルトキハ其登記簿中未タ登記ヲ爲サ、ル他ノ用紙ニ原番號ヲ轉寫シ之ニ其番號ノ第二ナルコトヲ付記シ原用紙番號ノ下ニハ第一ノ文字ヲ追加シ且第何冊何丁ニ續ク旨ヲ記載ス可シ第三以下ノ續テ設ケルトキ亦此例ニ準ス

前項ノ場合ニ於テ新用紙ニハ原用紙ニ記載アル登記ノ順番ニ繼續シテ之ヲ付ス可シ

第三十二條 登記簿ニ登記ヲ爲ス字畫ハ鮮明ナルヲ要ス又金錢物品ノ數量ヲ記スルニハ必ス壹貳參拾ノ文字ヲ用フ可シ

登記ヲ爲スニハ之ヲ墨書ス可シ
文字ハ之ヲ改竄ス可カラス若シ削除スルトキハ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存ス可シ

訂正挿入削除等ヲ爲シタルトキハ登記官吏之ニ印ス可シ
本條ノ規定ハ受付帳ニモ亦之ヲ適用ス

登記ノ變更ニ依リ削除ス可キ原登記ハ其側ニ朱線ヲ畫ス可シ

第十二條 商法第八百二十七條ノ船舶登記證書及ヒ同第八百五

第十四條ノ登記證書ハ附録第十號及ヒ第十一號ノ雛形ニ依リ之ヲ調製ス可シ

○參照（商法）

（イ）第八百二十七條（第二項）登記ヲ爲シタルトキハ其登記ト同文ノ船舶登記證書ヲ作リテ之ヲ所有者ニ交付ス

（ロ）第八百五十四條 登記ヲ爲シタルトキハ登記證書ヲ交付スヘシ其以前ニ登記シタル債權アルトキハ其債權ヲ併記ス可シ此證書ハ裏書ヲ以テ之ヲ讓渡スコトヲ得其裏書讓渡ハ船舶登記簿ニ登記ヲ受ケルニ非サレハ第三者ニ對シテ其效ナ有セス

第十三條 登記簿ハ何人ト雖モ之ヲ閱覽スルコトヲ得ルモノトス其閱覽ハ吏員ノ面前ニ於テ之ヲ爲サシム可シ
登記簿ノ謄本ヲ請フ者アルトキハ謄本ノ末尾ニ原登記ト相違スルコトナキ旨ヲ認證シ年月日ヲ記シ登記官吏之ニ署名捺印シテ交付ス可シ

遠隔ノ地ヨリ謄本ヲ請フ者アルトキハ謄本手数料ノ外郵送料ヲ前納スルニ於テハ亦之ヲ送付ス可シ

第十四條 商業登記ニ關スル登記所ハ東京市ニ在テハ京橋區區裁判所トス

第十五條 明治二十三年勅令第三百三十三號ニ定メタル商業及船舶ノ登記公告手数料ハ登記印紙ヲ陳述書若シ陳述書アラサルトキハ明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則第六條ニ依リ名刺ニ貼付スヘシ

○參照（明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則）

第六條 登記ヲ請フ者ハ第二號書式ニ準シ登記ノ件目等ヲ記載シ實印ヲ押シタル名刺ヲ登記所ニ差出ス可シ但商法ニ依リ船舶ノ登記ヲ受ケルモノハ明治二十三年省令第八號第五條ニ從ヒ陳述書ヲ差出スヘシ
登記簿ノ謄本若クハ抜書又ハ登記簿ノ閱覽ヲ請フ者亦同シ

民事訴訟法

○民事訴訟法施行條例(明治廿三七月 法律第五十號)

朕民事訴訟法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟法施行條例

第一條 民事訴訟法實施前ニ提起シタル訴訟ニ付テノ爾後ノ訴訟手續ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス

第二條 民事訴訟法實施前ニ闕席ノ儘言渡シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ期間ハ新法ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ其期限ニ從フ

第三條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ニ對スル控訴上告期限

ハ新法ノ控訴上告期間ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ其期限ニ從フ

第四條 民事訴訟法實施前ニ確定シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ再審ヲ求ムルヲ爲スコトヲ得但民事訴訟法實施前ニ其條件生シタルトハ其條件ノ生シタル日ヨリ再審ノ期間ヲ起算ス

第五條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ強制執行ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス但シ既ニ身代限ノ揭示ヲ爲シ又ハ公賣ニ著手シタル事件ハ其手續ノ終了マテハ舊法ニ從フ

第六條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ執行命令ヲ得サル場合ニ於テ民事訴訟法第四百九十九條ノ規定ニ從ヒ證明書ヲ要スル者ハ其訴訟記録ノ存在スル裁判所ニ之ヲ求ムルコトヲ得

○參照（民事訴訟法）

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムル

トキハ第一審裁判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス

訴訟カ猶ホ上級審ニ於テ緊留ナルトキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス

判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與スルコトヲ得サルトキニ限り上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル證明書ヲ以テ足ル

第七條 民事訴訟法實施前既ニ勸解ヲ出願シ未タ完結ニ至ラサル事件ハ民事訴訟法第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所繼續シテ之ヲ完結スルコトヲ得

○參照（民事訴訟法）

第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出スコトヲ得申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得當事者双方出頭シ和解ノ開ヒタルトキハ調査ヲ以テ之ヲ明確ナラシ

民事訴訟法（民事訴訟法施行條例）

△可シ

和解ノ調ハサルトキハ當事者双方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルトキハ此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

四

第八條 民事訴訟法ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第九條 民事訴訟法ニ於テ親族ト稱スル者ハ當分ノ内刑法ノ親屬例ニ依ル

○參照(刑法第十章)親屬例

第一百四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

- 一 祖父母父母夫妻
- 二 子孫及ヒ其配偶者
- 三 兄弟姉妹及其配偶者

四 兄弟姉妹ノ子及其配偶者

五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

六 父母ノ兄弟姉妹ノ子

七 配偶者ノ祖父母父母

八 配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

九 配偶者ノ兄弟姉妹ノ子

十 配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第一百五條 祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ
養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第十條 婚姻離婚及養子ノ縁組離縁ニ關スル訴ニ付テハ特別ノ慣例アルモノハ當分ノ内其慣例ニ從フ

第十一條 明治八年第六號布告ハ當分ノ内其効ヲ有スルモノトス

民事訴訟法（民事訴訟法施行條例）

○参照(明治八年第六號布告)

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサ
ル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改候條此旨布告候事

第一條 債主定期期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定期滿期ニ至
テ直ニ裁判所へ訴出ツ可キ事

第二條 債主未メ負債者ノ失踪ヲ知ラス定期滿期又ハ出訴期限將ニ盡
ントスルヲ以テ裁判所ノ稟書ヲ以テ負債者ニ掛合給テ其失踪ノ了チ
知ル時ハ右稟書狀ヲ再呈シ其旨届出ツ可キ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管
ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル証書ニ負
債者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又
ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續チ爲ス可キ者ニ掛リ此稟書証書ヲ以テ
再訴致ス可キ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ稟書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ
搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴期限

ノ限内ニハ加算致サ、ル事

第十二條 明治十年第十九號布告控訴上告手續第十六條中大審院ト
アルヲ上告裁判所ト改メ該條ハ當分ノ内其効力ヲ有スルモノトス

○参照(控訴上告手續)

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ上告裁判所ニ預クヘシ若
シ其金高チ預ケサル時ハ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第一 若シ上告取り上ケサルキハ其預金ヲ没入ス

第二 若シ上告取り上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告取上ケ被告入ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ
破毀セサル時ハ預金ヲ没入シ其訴訟入費規則ニ照シテ被告人
ノ費用ヲ償ハシム被告人トハ上告者ノ相手方チ云フ

○民事訴訟費用法(明治廿三年八月
法律第六十四號)

朕民事訴訟費用法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四

民事訴訟法(民事訴訟費用法)

年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟費用法

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴狀其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手數料及ヒ立替金ハ執達吏手數料規則ノ規定ニ從

テ

第六條 郵便料、電信料、及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報、公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條 民事訴訟法第二百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○參照(民事訴訟法)

第二百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辨論ヲ棄トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辨護士ニハ本法ノ規定ヲ適用セス

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ二十五錢トス

第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ此日當ヲ給セス

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル
鑑定ヲ爲スニ付キ別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル

第十二條 常事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五錢トシ證人鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日金五十錢トス

第十三條 常事者證人鑑定人及通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス

通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢證ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及ヒ滞在費ハ證人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノヲ除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

○民事訴訟用印紙法（明治二十三年八月法律第六十五號）

朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟用印紙法

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

- 訴訟物ノ價額金五圓マテ 二十錢
- 同 十圓マテ 三十錢
- 同 二十圓マテ 六十錢
- 同 五十圓マテ 一圓五十錢
- 同 七十五圓マテ 二圓二十錢
- 同 百圓マテ 三圓
- 同 二百五十圓マテ 六圓五十錢

- 同 五百圓マテ 十圓
 - 同 七百五十圓マテ 十三圓
 - 同 千圓マテ 十五圓
 - 同 二千五百圓マテ 二十圓
 - 同 五千圓マテ 二十五圓
 - 同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ二圓ヲ加フ
- 訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

○參照（民事訴訟法）

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス
果實損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ
一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲ケルモ
ノヲ除ケ外其額ヲ合算ス

民事訴訟法（民事訴訟用印紙法）

十四

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 貸貸借又ハ永貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借貸ノ額ニ依ル但一个年借貸ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給額ハ収益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一个年取入ノ二十倍ノ額ニ依ル但取入額ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ取入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓

ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第六條 左ニ掲クル書類ニハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一 抗告

民事訴訟法（民事訴訟用印紙法）

十五

第二 故障

第三 證據調ノ申立

第四 假差押及ヒ假處分ノ申請

第五 判決ノ送達アラシコトヲ求ムル申立

第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ第一通毎ニ五十錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

○參照(民事訴訟法)

第三百八十一條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シ相手方ヲ其普通裁判所ヲ有スル區裁判所ニ呼出ス可キコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

當事者双方出頭シ和解ノ調ヒタル所ハ調査ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ

和解ノ調ハサルトキハ當事者双方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直ニニ辨論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルトキハ此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ區裁判所ノ管轄ニ属スルトキハ其訴ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辨論ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ定ム

第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

民事訴訟法 (民事訴訟用印紙法)

十八

第十條 答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙貼用ヲセサル民事訴訟ノ書類ハ其效ナキモノトス但印紙ヲ貼用セズ又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

○參照(民事訴訟法)

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

- 第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟済スルコトノ假免除
- 第二 訴訟費用ノ保証ヲ立ツルコトノ免除
- 第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若

クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

○參照(明治十七年第四號布達)

今般第五號ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左ノ通之ヲ定ム

淡黑色印紙	一枚三錢
黑色印紙	同 五錢
赫色印紙	同 拾錢
茶褐色印紙	同 五拾錢
黃色印紙	同 壹圓
青色印紙	同 五圓
橙黃色印紙	同 拾圓
綠色印紙	同 拾五圓
嬌栗色印紙	同 貳拾圓

民事訴訟法 (民事訴訟用印紙法)

十九

印紙ハ訴狀其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印ス可シ
第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其
他ニ於テ賣買スルコトヲ許サス

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以上二
百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買
取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒
收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕再犯加重及ヒ數
罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用
ス

○家資分散法(明治二十三年八月
法律第六十九號)

朕家資分散法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一

月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

家資分散法

第一條 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辯済スル資力ナキ
債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ由リ決定ヲ以テ家資分散者
タルノ宣告ヲ爲ス可シ

右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得
此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ公
告ス可シ

第四條 家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ選舉權及被選舉權ヲ
失フ

家資分散者ノ復權ニ付テハ商法第千五十五條以下ヲ準用ス

○參照(商法)

第一千五十五條 復権ヲ得ルニハ協賛契約ノ調ヒタルト否トテ同ハス破産者カ元債、利息、及ヒ費用ノ全額ヲ債権者總員ヲ辨償シタルコト又所在ノ知レサル爲メ未タ辨償ヲ受ケサル債権者ニ金額ヲ辨償スル準備及ヒ資カアルコトヲ證明ス可シ

復権ノ申立ニハ債権者ノ受取証其他必要ナル證據物ヲ添フ可シ

然レトモ協賛契約ノ場合ニ於テハ第一項ノ證明ヲ爲スコト無クシテ取引所ニ立入ルコトヲ得又商事会社ニ付キ協賛契約ノ調ヒタルトキハ無限責任社員若クハ取締役ハ亦其證明ヲ要セスシテ会社ヲ繼續スルコトヲ得

第一千五十六條 復権ノ申立アリタルハ破産裁判所ハ異議アル者ヲシテ二个月ノ期間ニ異議ヲ起サシメンカ爲メ裁判所ノ揭示場ト取引所トニ其旨ヲ揭示シ且裁判所ノ見込ニ因リ新聞紙ヲ以テ之ヲ公告シ又調査及ヒ捜査ヲ爲サシメンカ爲メ之ヲ檢事ニ通知ス可シ
裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後復権ノ申立ヲ許可スルト否トテ決定

ス此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得確定シタル決定ハ之ヲ公告ス

棄却セラレタル申立ハ一年ノ滿了前ニハ再ヒ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一千五十七條 復権ハ債務者ノ死亡後ト雖モ之ヲ許ス

第一千五十八條 復権ハ詐欺破産ノ爲メニ判決ヲ受ケタル破産者又ハ重罪、輕罪ノ爲メニ剝奪公權若クハ停止公權ヲ受ケテ其時間中ニ在ル破産者ニハ之ヲ許サス

過怠破産ノ場合ニ在テハ復権ハ刑ノ滿期ト爲リ又ハ恩赦ヲ得タル後ニ非サレハ之ヲ許サス

第五條 商法及本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ効力ヲ有ス

○陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法(明治二十三年八月法律第六十七號)

朕陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法

第一條 軍法會議私訴裁判ノ強制執行ハ兵營艦船若クハ軍事用廳舎ニ於テ行フ場合ヲ除ク外軍法會議ノ囑託ニ因リ通常裁判所之ヲ行フ

第二條 軍法會議ハ軍法會議私訴裁判ノ強制執行ニ關シテハ職權ニ因リ若クハ原告人又ハ被告人ノ申立ニ因リ補充及取消ノ命令ヲ爲スコトヲ得

第三條 軍法會議私訴裁判ノ強制執行ハ判決言渡書ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

前項言渡書ノ正本ハ原告人ノ請求ニ因リ軍法會議之ヲ付與ス

第四條 軍法會議ハ必要ト認ムル場合ニ於テ假執行假差押假處分ノ命令ヲ爲ス

假執行ヲ命シタルトキハ其旨ヲ言渡書ノ正本ニ附記ス

本條ノ場合ニ於テハ保證又ハ供託ヲ命スルコトアルヘシ

第五條 第一條ニ依リ通常裁判所ニ於テ強制執行ヲ爲ストキハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

○婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則

則 (明治廿三年十月
法律第百四號)

朕民事訴訟法ノ補則トシテ婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則

第一章 婚姻事件及ヒ養子縁組事件ノ訴訟手續

第一條 婚姻ノ無効離婚又ハ同居ヲ目的トスル訴訟ハ夫カ普通裁判

籍ヲ有スル地ノ地方裁訴所ノ管轄ニ專屬ス
縁組ノ無効又ハ離縁ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通
裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁訴所ニ專屬ス
婚姻又ハ縁組ノ不成立ニ關スル訴訟ハ被告カ普通裁判籍ヲ有スル
地ノ地方裁訴所ニ專屬ス

第二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ニ付テハ檢事ハ口頭辯論ニ立會フノ
外受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲ス審問ニモ亦立會フコ
トヲ得檢事ニハ職權ヲ以テ總テノ期日ヲ通知ス可シ
檢事ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提
出スルコトヲ得

調書ニハ檢事ノ氏名及ヒ其申立ヲ記載ス可シ

第三條 婚姻ノ不成立無効離婚及ヒ同居ノ訴ハ之ヲ併合スルコトヲ
得縁組ノ不成立無効及ヒ離縁ノ訴モ亦同シ

婿養子縁組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ不成立無効離婚又ハ同居ノ訴ニ
縁組不成立無効又ハ離縁ノ訴ヲ併合スルコトヲ得
本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ併合シ及ヒ他ノ種類ノ反訴ヲ提起スルコトヲ
得ス但本條ノ訴ノ原因タル事實ヨリ生スル損害賠償及ヒ養料請求
ニ付テハ此限ニ在ラス

第四條 判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴ニ於テ提出
シタル以外ノ理由ヲ主張スルコトヲ得

第五條 婚姻ノ無効若クハ離婚ノ訴又ハ縁組ノ無効若クハ離縁ノ訴
ニ付キ棄却ノ言渡ヲ受ケタル原因ハ前訴訟ニ於テ又ハ訴ノ併合ニ
因リ主張スルヲ得ヘカリシ事實ヲ獨立ナル訴ノ理由トシテ主張ス
ルコトヲ得ス被告ニ在テハ反訴ノ理由ト爲スヲ得ヘカリシ事實ニ
付テモ亦同シ

第六條 民事訴訟法第百十一條第二項第三項第二百十條及ヒ第三百

三十五條乃至第三百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セス

○參照（民事訴訟法）

第百十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ自白シタルモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ヌ又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遲延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遲延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命セン

ヲ申立テテ之ヲ爲スヘシ

第三百三十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ

第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ

條三百三十八條 證書ノ提出ヲ命セントノ申立ニハ左ノ條件ヲ掲ケ可シ

第一 證書ノ表示

第二 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ表示

第三 證書旨趣

第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表示

第三百三十九條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且申立テ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルトキハ證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命ス

第三百四十條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサランシメタルヤ否ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルトキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルヲ得サル旨ヲ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可シ

第三百四十一條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒

ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサランシメタルコトノ明確ナルトキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出サハルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出サハルトキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ス

第七條 口頭辯論ノ期日ニ被告カ出頭セサルトキハ原告ノ申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ

被告ノ在廷セサル場合ニ於テ期日ヲ定メタルトキハ其都度被告ヲ呼出ス可シ

闕席判決ハ本條ノ手續ノ效アラサルトキニ限り被告ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第八條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命シテ其原告若クハ

被告又ハ其相手方若クハ檢事ノ主張シタル事實ニ付キ原告若クハ被告ヲ審訊スルコトヲ得

審訊ヲ受ク可キ原告若クハ被告カ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ又ハ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルトキハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ審訊ヲ爲スコトヲ得

出頭セサル原告若クハ被告ニ對シテハ審訊期日ニ出頭セサル證人ニ對スル規定ヲ適用ス

第九條 和諧ノ調フ可キ見込アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ離婚又ハ離縁ノ訴ニ關スル手續ヲ長クトモ一个年間中止スルコトヲ得

第十條 裁判所ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ當事者ノ提出セサル事實ヲモ斟酌シ且職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得但裁判前ニ當事者ヲ審訊ス可シ

第十一條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無効又ハ離婚若クハ離縁ヲ

言渡ス判決職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第十二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ノ判決ニ付テハ假執行ノ宣言ヲ付スルコトヲ得ス

第十三條 假處分ニ關シ殊ニ配偶者ノ一方又ハ養子カ住家ヲ去ルノ許可及ヒ養料ノ供給ヲ申立テタル場合ニ於テハ民事訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ規定ヲ準用ス

○参照（民事訴訟法）

第七百五十六條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付テハ假差押ノ命令及ヒ手續ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生ヌルトキ此限ニ在ラス

第七百五十七條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁判所之ヲ管轄ス右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第七百五十八條 裁判所ハ其意見ヲ以テ申立ノ目的ヲ達スルニ必要ナル處分ヲ定ム

假處分ハ保管人ヲ置キ又ハ相手方ニ行爲ヲ命シ若クハ之ヲ禁シ又ハ給付ヲ命スルコトヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

假處分ヲ以テ不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當ト爲スコトヲ禁シタルトキハ裁判所ハ第七百五十一條ノ規定ヲ準用シテ登記簿ニ其禁示ヲ記入セシム可シ

第七百五十九條 特別ノ事情アルトキニ限り保証ヲ立テシメテ假處分ノ取消ヲ許スコトヲ得

第七百六十條 假處分ハ争アル權利關係ニ付キ假ノ地位ヲ定ムル爲ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得但其處分ハ殊ニ繼續スル權利關係ニ付キ著シキ損害ヲ避ケ若クハ急迫ナル強暴ヲ防ク爲メ又ハ其他ノ理由ニ因リ之ヲ必要トスルトキニ限ル

第七百六十一條 急迫ナル場合ニ於テハ係争物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ハ假處分ノ當否ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ本案ノ管轄裁判所ニ相手方ヲ呼出ス可キ申立ノ期間ヲ定メ假處分ヲ命スルコトヲ得
此期間ヲ徒過シタル後區裁判所ハ申立ニ因リ其命シタル假處分ヲ取

消ス可シ

右裁判ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

第七百六十二條 本章ノ規定ニ於ケル本案ノ管轄裁判所ハ第一審裁判所トス但本案カ控訴審ニ繫属スルトキニ限り控訴裁判所トス

第七百六十三條 急迫ナル場合ニ於テ口頭辯論ヲ要セサルモノニ限り裁判長ハ本章ノ申立ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

第十四條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無効又ハ離婚若クハ離縁ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第十五條 民法ノ規定ニ從ヒ檢事ノ職權ヲ以テ起スコトヲ得ヘキ無効ノ訴ニ付テハ以下數條ニ定メタル特別ノ規定ニ從フ

第十六條 檢事又ハ第三者ヨリ訴ヲ起ストキハ夫婦又ハ養親子ヲ以テ相手方ト爲ス

夫婦又ハ養親子ノ一方ヨリ訴ヲ起ストキハ他ノ一方ヲ以テ相手方

ト爲ス

第十七條 檢事ハ自ラ訴ヲ起ササルトキト雖モ訴訟ヲ進行シ殊ニ獨立シテ申立ヲ爲シ及ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十八條 檢事上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ前審ノ當事者雙方ヲ相手方ト看做ス

檢事カ訴訟人タル場合ニ於テ當事者ノ一方カ上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ他ノ一方ト檢事トヲ相手方ト看做ス

第十九條 訴訟人タル檢事カ敗訴スル場合ニ於テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ニ從ヒ勝訴者タル相手方ニ生シタル費用ハ國庫ノ負擔トス（民事訴訟法第一編第二章第五節ハ裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避ノ條項ニ係ル）

第二章 禁治産事件ノ訴訟手續

第二十條 禁治産ノ申立ハ治産ヲ禁セラル可キ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第二十一條 申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其申立ニハ申立ノ理由タル事實及ヒ證據方法ノ表示ヲ包含ス可シ

第二十二條 裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及ヒ證據方法ニ依リ職權ヲ以テ心神喪失ノ常況ニ在ルヤ否ヲ定ムル爲メニ必要ナル探知ヲ爲シ且適當トスル證據方法ヲ調フ可シ

裁判所ハ訴訟手續ヲ開始スルノ前診斷書ノ提出ヲ命スルコトヲ得
檢事ハ總テノ場合ニ於テ申立ヲ爲シテ訴訟手續ヲ進行スルコトヲ得

證人及ヒ鑑定人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ民事訴訟法第二編第一章第六節及ヒ第七節ノ規定ヲ適用ス（民事訴訟法第二編第一章第六節及ヒ第七節ハ人証、鑑定ノ條項ニ係ル）

第二十三條 裁判所ハ公開セサル法廷ニ於テ一人又ハ數人ノ鑑定人ノ立會ヲ以テ治産ヲ禁セラル可キ者ヲ訊問ス可シ此訊問ハ受託判事ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

右訊問ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ實施シ難ク又ハ裁判ノ爲メニ必要ナラス又ハ治産ヲ票セラル可キ者ノ健康ニ害アリトスルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二十四條 禁治産ノ宣言ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

右宣言ハ豫メ治産ヲ禁セラル可キ者ノ心神喪失ノ常況ニ付キ一人又ハ數人ノ鑑定人ヲ訊問シタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十五條 裁判所ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ身體ノ監護又ハ財産ノ保存ニ付キ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第二十六條 訴訟手續ノ費用ハ治産ヲ禁シタル場合ニ於テハ禁治産者之ヲ負擔シ其他ノ場合ニ於テハ禁治産ノ申立ヲ爲シタル者之ヲ負擔ス可シ但檢事カ申立ヲ爲シタルトキハ國庫之ヲ負擔ス

第二十七條 禁治産ニ付キ爲シタル決定ハ職權ヲ以テ申立人及ヒ檢事ニ之ヲ送達ス可シ

第二十八條 禁治産ヲ宣言スル決定ハ法律上ノ後見人アルトキハ其後見人ニ職權ヲ以テ之ヲ通知ス可シ

第二十九條 申立人及ヒ檢事ハ禁治産ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ第二十二條ノ規定ヲ準用ス

第三十條 禁治産ヲ宣言スル決定ニ對シテハ一个月ノ期間内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

訴ヲ起スノ權利ハ禁治産者其後見人及ヒ民法ノ規定ニ從ヒ禁治産ノ申立ヲ爲スノ權ヲ有スル者ニ屬ス

右期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ヲ知りタル日ヲ以テ始マリ其他ノ者ニ對シテハ後見人ノ選定ヲ以テ始マリ又法律上ノ後見ノ場合ニ於テハ其決定ヲ法律上ノ後見人ニ通知スルヲ以テ始マル

第三十一條 訴ハ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄ニ

專屬ス

四十

第三十二條 禁治産ニ對シテ不服ヲ申立ル訴ニハ他ノ訴ヲ併合スルコトヲ得ス

反訴ハ之ヲ爲スコトヲ許サス

第三十三條 禁治産者カ訴ヲ起サントスルトキハ其申立ニ因リ受訴裁判所ノ裁判長ハ訴訟代理トシテ辯護士ヲ之ニ附添ハシム可シ

第三十四條 第六條及ヒ第七條ノ規定ハ本章ニモ之ヲ準用ス

第三十五條 第二十三條及ヒ第二十四條第二項ノ規定ハ不服申立ノ訴ニ付テノ訴訟手續ニ之ヲ準用ス

裁判所ハ區裁判所ニ於テ爲シタル鑑定ヲ十分ナリト認ムルトキハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ササルコトヲ得

第三十六條 不服申立ノ訴ヲ理由アリトスルトキハ禁治産ヲ宣言シタル決定ヲ取消ス可シ

然レトモ此取消ノ判決ハ後見人ノ既ニ爲シタル行爲ノ效力ニ影響ヲ及ホサス

第三十七條 不服申立ノ訴ニ關スル訴訟費用ニ付テハ第二十六條ノ規定ヲ準用ス

第三十八條 受訴裁判所ハ禁治産事件ニ付キ爲シタル總テノ終局判決ヲ區裁判所ニ通知ス可シ

第三十九條 禁治産ノ解止ニ付テハ第二十五條ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第四十條 準禁治産事件ニ付テハ左ノ特別ナル規則ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第二十二條 第二項ハ浪費者ニ之ヲ適用セス
又同條第二項第二十五條第三十三條及ヒ檢事ニ關スル規定ハ總テノ準禁治産者ニ之ヲ適用セス

民事訴訟法（婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則） 四十二

準禁治産ヲ解止スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

新法附典全書終

明治廿三年十一月十九日印刷
十一月廿一日出版

(正價金二十五錢)

兼發行編輯者

井本常治
神田區仲猿樂町十七番地

編輯者

鈴木敬親
神田區裏神保町七番地

全

鹽入太輔
神田區小川町四十一番地

全

佐々木忠藏
神田區裏神保町七番地

印刷者

齋藤孝治
全 裏神保町四番地

發行所

政治學講習會

東京神田區裏神保町七番地

印刷所 京橋區弓町拾三番地

續文舍

逓信省認可

68
2

1348



政治學講義錄號外

新法附典全書

完

發賣所

東京

明法堂

031021-000-0

CZ-5-0234

新法附典全書

緩鹿 実彰 / 編

M23

BBC-0494

